

巻頭特集 未来ヘトライ！地域で育む笑顔と絆

# 箕面ラグビースクール

ラグビーといえば、体と体がぶつかり合う激しいスポーツ、という印象を持たれがちだが、子ども向けのラグビーはボールを持って走ることが基本。「走る、投げる、蹴る、タックル。ラグビーには子どもが楽しいと感じることがたくさんある。その魅力を体感して欲しい」。そんな思いで活動する同スクールを取材した。

## まずは楕円形のボールに慣れ ラグビーを楽しむことが一番

「我が子にもラグビーの楽しさを知って欲しい」という思いのもと、1988年、『箕面ラグビースクール』はラグビー経験者の保護者が集まり結成された。「今こそ、ラグビーは注目されていますが、当時、ラグビーは子どものスポーツとはあまり認知されていなかった。近隣の方に

声をかけて広げていきました」と当初からコーチを務める水口献児さん。コーチとスクール生、約20名ではじまった同スクールは、現在、幼稚園から中学生まで約



代表 和田光彦さん

「ラグビーの魅力は、走る、投げる、蹴る、タックルするなど様々な要素があり、体格や体力、スキル、個性が活かせるポジションがあること。試合もレギュラーを固定することなく、皆が楽しめるように配慮しています」



中学部主任コーチ 与儀実仁さん

「中学部では小学生の見本となるように挨拶や礼儀はきちんとするように心がけています。過渡期でもある中学生は、学校のクラブとの両立、難しい面もありますが、楽しいラグビーを覚えて、好きになって続けてもらえると嬉しいです」



「ママーズ」の皆さん

夏の合宿と3月のノーサイドパーティーの親子試合のため、小学6年生の母親で結成される「ママーズ」。「練習や試合では横からいろいろ言っていたけれど、ルールも難しいし、身を持ってラグビーの大変さが分かった」、「同じスポーツを楽しめるいい機会だった」と嬉しそう

## ボールが紡ぐ 世代を超えた交流

練習は主に日曜の午前に行われる。まずは一礼をしてグラウンドに入り、整列。朝礼後は各学年に分かれて練習開始。学年ごとに数名のコーチが指導にあたる。子どもと一緒に走り、当たり、子ども一人ひとりの名前を呼びながら、褒めたり、アドバイスしたり。コーチの表情は真剣そのもの。しかし、ラグビー未経験者、他のスポーツをしていない者が多いと聞く。我が子の入部を機に、ラグビーの魅力に惹かれ、練習に混じり、共



1 ラインアウトの練習をする中学部の選手たち。中学部は学校の部活動との両立など、難しい時期だが、試合には高槻や茨木等との合同チームで出場。まずは楕円形のボールに慣れることから。上手に投げられるかな？ 2 5月に行われた「北摂ラグビースクール大会」では見事3位(敢闘賞)に

ぞれ成長しても、OBとしてコーチを務めてくれたり、遊びに来てくれたり、繋がっていることが嬉しい」と目を細める和田さん。子どもたちも、高校生や大学生に果敢にタックルしたり、追いかけてたり、無邪気に戯れる光景が微笑ましかった。世代を超えた交流も同スクールの魅力なのだろう。

## 一人はみんなのために みんなは一人のために

「One for all All for one(一人はみんなのために、みんなは一人のために)」。ラグビーの精神を語る上でよく使われる言葉だ。そ

松岡里奈さん(左) 松嶋凜子さん(右)

スクールには約10名の女子が在籍。「体格差のある男の子の中でプレーするのは大変だけれど、タックルで倒れたり、練習でやっていたことが試合で出せると嬉しい」と話す2人。夢は、オリンピックで正式種目となった女子ラグビーで活躍することだ！



「1つのトライに向かって全員で頑張る」、何事にも代え難い達成感がラグビーにはあるのだろう。これから試合が増え、シーズンを迎える同スクール。それぞれの目標を胸に、青空のもと日々成長する子どもたちの姿を温かく見守っていききたい。



に切磋琢磨するようになってきた保護者が多いそう。講習を受け、レフリーの資格を取る方もいるとか。そして、「子どもたちが成長する姿から元気をもらおう。保護者との交流も楽しい」と、我が子が卒業してからも続ける方がほとんどだそう。練習や試合には、高校生や大学生、社会人など、スクールの巣立った卒業生が多く訪れる。「それ



中学部副キャプテン 高本とむくん(左) 小学部キャプテン 高本とわくん(右)

兄弟でスクールに通う2人。今年卒業を迎えるととむくんの目標は、秋開催、大阪府の「スクール大会」で優勝すること。とわくんもこれからのシーズンに向けて「1つひとつの試合にしっかり勝つこと」と力強く語ってくれた

## 取材協力



箕面ラグビースクール  
★問い合わせはHPにて  
<http://www.minoh-rs.jp>

